

油 症 — 発生後43年間の変遷 —

【油症発生当時の時代背景】

油症が発生した1968年当時は経済成長最優先の時代でした。PCB (polychlorinated biphenyls) 等の塩素系化合物は安定で便利なものとして各種産業で使用されました。ところが廃棄されたPCBは分解されないののでいつまでも環境中に残留しました。脂質に溶けやすいPCBは、結局、食物連鎖を介して人体に高濃度に蓄積してしまいました。

【油症の発生と原因】

食用油であったカネミライスオイルを精製する過程で、加熱目的で熱媒体として使用されていたPCBが、食用油に混入し、その食用油を摂食した人たちにPCB中毒が発生しました。油を摂食したために発生した疾患ですので油症と呼ばれました。英語の疾患名としてもYushoと呼ばれています。汚染されたカネミライスオイル中にはPCBの他に、PCQ (polychlorinated quaterphenyls) やダイオキシン類であるPCDF (polychlorinated dibenzofurans) も混入していたので油症特有のひどい症状がみられました。

【油症発生当時の症状とその後の経過】

1970年頃の重症の油症患者さん及び一般福岡市民における脂質当りの平均血液中ダイオキシン毒性相当濃度 (TEQ) (体内のダイオキシン類毒性度の総量) はそれぞれ50,000ppt及び100pptでした。このTEQは2005年頃には重症の油症患者さんが500ppt及び一般福岡市民20pptに減少しています。一般市民も昔は環境中にたくさん存在したPCB類に曝露されていたので血液中の濃度が高かったことが分かります。大部分の油症患者さんは、重症の油症患者さんと一般市民の中間の濃度でTEQが推移したものと考えられます。

油症事件発生当時の患者さんの症状は塩素痤瘡 (黒ニキビ)、色素沈着、眼脂過多 (めやにが多い) など油症特有の症状がたくさんでしたが、それらは時間の経過とともに判別しがたいものになってきました。しかし、体内に蓄積したダイオキシン類によって引き起こされる酵素誘導やホルモン異常が原因とみられる症状 (たとえば高脂血症、血

清サイロキシン濃度の異常、甲状腺腫、歯及び関節などの異常、頭痛・しびれ等神経系の異常など) は40年以上経過した現在でも継続して見られます。

【近年のダイオキシン類研究で明らかになってきたこと】

また体内に蓄積したPCB・ダイオキシン類が互いに影響しあうことも明らかになってきました。PCDFは毒性度が高いので微量でも強力な酵素誘導作用があるため、PCBを変化させ水酸化PCBを生成させます。水酸化PCBは血液中のサイロキシン輸送蛋白という蛋白質と結合して血液中に残留します。水酸化PCBは脳神経細胞培養において神経発達に異常を起こすことがあります。胎盤や母乳を介して胎児に移行する可能性もあります。他のさまざまなダイオキシン類の胎児移行もありますので、お子さんたちへの影響は慎重に検討していかなければならない重要な課題です。

【日常生活で気をつけること】

多くの油症患者さんは高齢になられたので、いわゆる成人病 (がん、脳卒中、心臓病、糖尿病等) に対する養生が必要だと思います。基本的には腹8分目の食事をとり、体調に合わせた適度な運動が必要でしょう。私の血液中TEQ濃度は脂質ベースで80pptであります。2000年頃の一般福岡市民の中には100 pptと高濃度の人もおられましたので、私のダイオキシン汚染は一般人の中では高い方だと思います。私は一昨年76歳の時に心筋梗塞で緊急入院し、ステントを挿入する手術により回復しました。私は食品摂取量を1日1600kcalにして、毎日1万歩の運動を続けています。また、食物繊維を多く含む野菜や果物600g以上を毎日食べています。体内のPCB等は食物繊維と共に少しずつ排泄されることが分かっていますので、油症患者さんには食物繊維をたくさん食べていただくことが必要だと思います。

第一薬科大学名誉教授

増田 義人

問い合わせ先：全国油症治療研究班 班長 古江 増隆 (ふるえ ますたか)
〒812-8582 福岡市東区馬出3-1-1 九州大学医学部皮膚科教室
TEL 092-642-5582/FAX 092-642-5600